

児童の自己理解の深まりと自己肯定感の高まりを目指した 自立活動の授業実践

— 各関係機関と連携した児童の実態把握と「自己紹介ブック」作りを通して —

大桃友加里¹ 佐藤 慎二²

Class practice of independence activity aiming at deepening children's self-understanding and increasing self-affirmation

OMOMO Yukari SATOH Shinji

児童の自己理解の深まりと自己肯定感の高まりを目指し、各関係機関と協働して児童の情報共有や特性、成長のつまずき及び諸検査の分析を取り入れた「自己紹介ブック」作りの授業を行い、児童や関係者への質問紙調査や半構造化面接、授業のビデオ分析、各関係機関との検討会等を通して、その効果の分析・検証を行った。その結果、具体的かつより明確な個に応じた支援方法を導き出すことができ、児童の自己理解の深まりと自己肯定感が高まりが見られる等、効果的な自立活動の授業実践につながった。

キーワード：自立活動、自己理解、自己肯定感、各関係機関との連携

1 問題と目的

令和2年度から全面実施された小学校学習指導要領の総則において、新たに「障害のある児童などへの指導」が具体的に記載された。また、特別支援学級において自立活動を取り入れることが明記される等、特別支援学級における自立活動の重要性が指摘されている。筆者はこれまで、自立活動の実践に以下を重視して取り組んできた。

- ①課題はスモールステップにし、児童の興味や関心を大切にすることで、意欲や自信をもって自ら学びに向かえるように学習を組み立てること。
- ②児童が「分かる」「できた」を実感し、「困った時は〇〇してみよう」と前向きな気持ちを抱く等、自分自身の変容に気付けるようにすることであった。

一方、課題として、

- ①行動観察や保護者からの情報収集だけでは、児童の抱える困難さの把握が難しいのではないかと。
- ②そのような実態把握の不十分さが要因となり、児

童の自己理解を深め、自己肯定感を十分に高めることができていなかったのではないかと考えた。そこで、本研究では、先行研究を踏まえ、以下のような授業実践を展開する。

- ①各関係機関から情報を収集したり、得た情報を互いに共有したりする等、福祉や医療等のそれぞれの立場でのアプローチについて学ぶ。
- ②検査協力員の経験と知識等を活かして、各関係機関と共に情報収集や情報共有、諸検査の分析、行動観察、支援の検討等の詳細な分析に取り組む。
- ③行動観察のみでは気付くことができない児童の困難さの背景等の実態把握に基づく自立活動の授業実践を行う。

以上3点を踏まえた実態把握を行うことで、児童が抱えている困難さを軽減し、もてる力を発揮することができる自立活動の授業実践を検討することを目的とする。

1 いすみ市立東海小学校

2 植草学園短期大学

2 実践研究 I (質問紙調査と実態把握)

2.1 質問紙調査

(1) 目的

各関係機関との連携や自立活動について調査し、その現状を明らかにする。

(2) 対象

千葉県 I 郡市内の小学校 18 校と中学校 6 校の特別支援学級（知的障害、自閉症・情緒障害）及び通級指導教室（言語障害、LD/ADHD 等）担当者 60 名（n = 52 回答率 86.6%）

(3) 期間 令和 3 年 5 月 25 日～6 月 18 日

(4) 方法 選択と記述併用の Google フォームによる調査

(5) 結果と考察

I 郡市は、特別支援学級等経験年数において、1 年目と 2 年目の教員が多く、21 年目以上の経験が豊かな教員が少ないことが明らかになった（図 1）。

自立活動の実践への満足度として、教員の約 60% が「どちらともいえない」と回答した。また、「とても満足している」「満足している」の回答を合わせても 30% に満たないことから、日々の実践の成果

が十分ではないと感じている教員が多いことが示唆された（図 2）。

各関係機関からの情報を自立活動の授業に活かしている教員は 20% 未満であることが明らかになった（図 3）。

図 4 から自立活動の実践に悩みを抱え困っている教員が約 60% いることが指摘された。具体的な回答内容として、「どんな授業を作ればよいのか悩んでいる」「児童に合っているのか心配」「こちらが必要と感じていても、当該児童が必要感や、困り感を抱えていないこと、どんな実践をすればいいか具体的な取り組みがわからないこと」「各児童の実態が違うので、単元や 1 時間の目標の設定が難しい」「生徒に必要な自立活動が実践できていない。生徒が変わった、身についたという実感がすぐにはないため、不安がある」と、自立活動の授業づくりやその効果についての悩みが挙げられていた。また、「学習を保障しながら、自立活動の時間を確保するのが難しい」「国語や算数の教科に追われ、自立活動に時間を割くことができていない」「自立活動の時間の確保が難しい」「通常学級での授業のバランスを

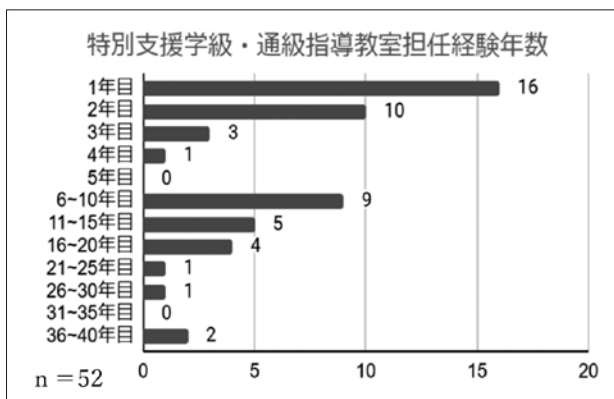


図 1 I 郡市における特別支援学級等経験年数

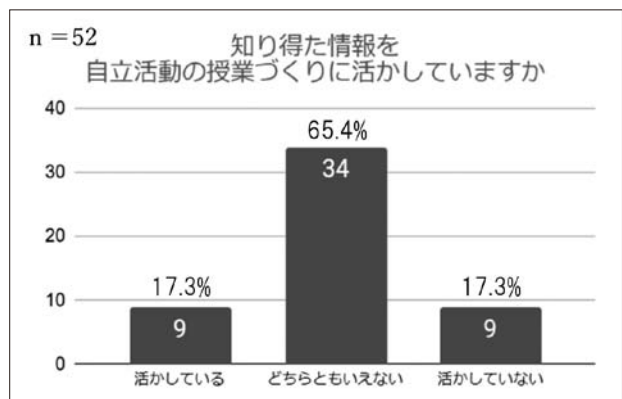


図 3 自立活動の授業づくりについて

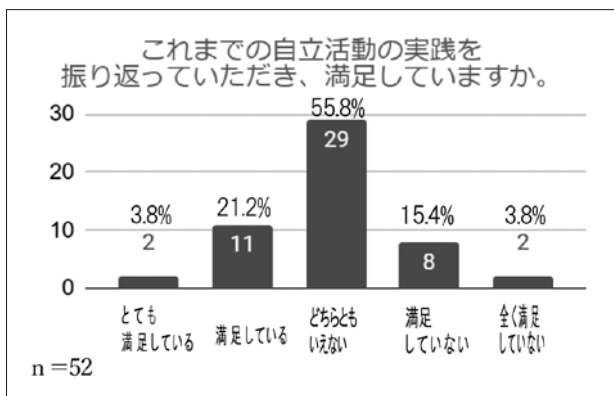


図 2 自立活動の満足度

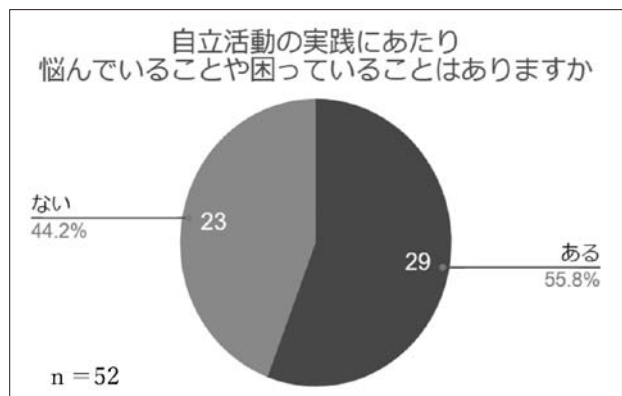


図 4 悩んでいることや困っていること

取るために、自立活動の時間を満足して取れない」と、自立活動の時間の確保に関する悩みも見られた。

本調査を受けて、また、児童生徒の実態の多様さからも、特別支援学級におけるより良い自立活動の授業実践について明らかにする必要性が示唆された。

2.2 児童理解に関する各関係機関との情報交換及び支援検討会

- (1) 目的 各関係機関と連携し、情報の共有と児童の実態を把握する。
- (2) 対象 各関係機関
- (3) 期間 令和3年5月～12月
- (4) 方法 面談
- (5) 結果と考察

学校生活では自分の思いが相手に届いていないことへの不満、家庭では弟とのけんかによる不満を感じていた。8月の保護者との面談からは、タブレットで動画をよく見ていることや「A児が転校したいと訴えている」との情報を得た。後者の理由として、「静かにしてと言っても聞いてくれない」とのことだった。医療機関や福祉機関からは、育ちの中での失敗経験が自尊感情や自己肯定感の低下に繋がっており、不安な思いを抱えているとの情報を得た。A児と保護者は思いの全てを学校で語り切れているわけではないと考えられるため、各関係機関と連携し、得た情報を基に適宜、半構造化面接を実施したり、実践により良く取り入れたりしていく等、A児の様子を丁寧に把握していく必要がある。また、心理士の立場からはつまずきの原因として、「自尊感情の低さは変わらず心の根底にある」との指摘がなされた。

2.3 実践研究と関連した調査（実態把握）

調査1

- (1) 目的 検証授業前の児童の学校生活や家庭での様子について把握する。
- (2) 対象 対象学級児童3名
- (3) 期間 令和3年5月19日～5月21日
- (4) 方法 6区分27項目によるチェックシート
半構造化面接
- (5) 結果

筆者作成のチェックシートから、「心理的な安定」と「人間関係の形成」の区分で課題があった。また、半構造化面接では、「友達が、僕のことを邪魔扱いする」と不安な思いや自分の思いが相手に受け

止められていない状況への不満を抱えていることが分かった。

調査2

- (1) 目的 発達の状況や得意不得意について把握する。
- (2) 対象 抽出児童1名（※以下「A児」）
- (3) 期間 令和3年6月7日
- (4) 方法 WISC-IV
- (5) 結果

VCI ≒ PRI ≒ PSI ≒ WMIのWMI高型であった。A児は、聴覚音声言語の処理能力が得意な力と推定される。一方、視覚情報を基に推理する力や課題を処理する力、言語面において弱さが見られた。

調査3

- (1) 目的 実践研究前の児童らの生活能力について把握する。
- (2) 対象 対象学級児童3名の保護者
- (3) 期間 令和3年6月7日
- (4) 方法 S-M社会生活能力検査-第3版-
- (5) 結果

6つの領域全てで、社会生活能力の育ちにつまずきがあることが分かった。生活年齢との開きが特に大きかったのは「集団参加」「作業」である。

調査4

- (1) 目的 検証授業前後の保護者から見た児童の自己肯定感について把握する。
- (2) 対象 対象学級児童3名の保護者
- (3) 期間 令和3年7月19日
- (4) 方法 自尊感情測定尺度（東京都版）及び面談
- (5) 結果

保護者から見たA児の自尊感情は、A児の結果と比較して低い傾向にあった。質問項目22問中、約3分の1（8問）が、図5で示すA児の前向きな回答と相反する回答であった。

調査5

- (1) 目的 検証授業前後の児童の自己肯定感について把握する。
- (2) 対象 対象学級児童3名
- (3) 期間 令和3年7月20日
- (4) 方法 自尊感情測定尺度（東京都版）
- (5) 結果

全体的な評価としての「A自己評価・自己受容」、

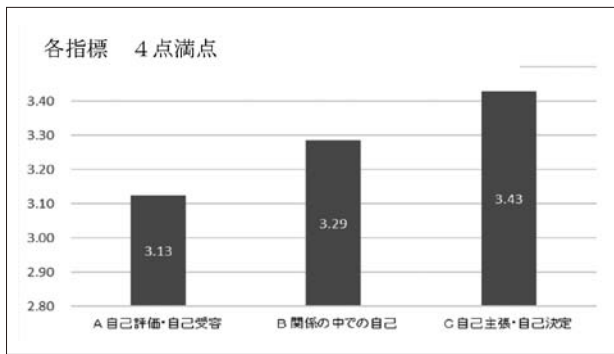


図5 A児の検証授業前の自尊感情

「B 関係の中の自己」、「C 自己主張・自己決定」の3指標内で、「A 自己評価・自己受容」が一番低い数値となっており、「私は自分という存在を大切に思える」の問いでは、2（どちらかというとあてはまらない）と回答した（図5）。

調査6

- (1) 目的 検証授業前後の自己理解について把握する。
- (2) 対象 対象学級児童3名
- (3) 期間 令和3年7月21日
- (4) 方法 厚生労働省の「指導に活用できるワークシート&知識『自己理解I amシート』」を参考にして筆者がワークシートを作成（※以下「自己理解I amシート」）

(5) 結果

実施時間20分間の中でA児は16個書くことができ、その内ネガティブな内容が5個書いてあった。「笑われたり、ちょっかいをかけられたりするのはいやです」と書いており、気付いたことの記入欄には、「いろいろいやなことが起きていることが分かった」と書いていた。

調査7

- (1) 目的 A児の心の理論について把握する。
- (2) 対象 A児
- (3) 期間 令和3年8月31日
- (4) 方法 コンピュータによるアニメーション課題「心の理論課題ver.2」（※以下「心の理論課題ver.2」）

(5) 結果

A児の他者に対する心の読み取り方や推測する力に課題があることが分かった。誤信念課題で不正解となり、他者の心の読み取り方につまずきがあった。

2.3.1 調査1～7の調査・検査結果の総合考察

(1) 諸検査の結果と文献による検討

生活年齢相応の力を発揮することが難しくうまくいかないストレスを抱えているのではないかと考えられた。また、心の理論課題の結果からは、学校生活では検査以上の複雑なやりとりがあるため、A児は他者の心を推測して理解することの難しさにより、対人関係で困難さを抱いていると推察される。それは、竹田らが指摘するように「メタ認知は、学習をするうえでも、社会生活を営むうえでも重要な役割を果たしている」「自分と他者の意図がずれたことを察知して修復を試みることも、メタ認知の働きである。メタ認知を使えるようになるためには、心の理論を通過し、自分も誤った考えをもつことに気づく必要がある。ASD児では小学校の中・高学年でこうしたことに気づくようになるため、この時期からメタ認知の力を高める指導が必要である」としていることから明らかである（竹田契一・上野一彦「特別支援教育の理論と実践 [第3版] II 指導」金剛出版2018年 pp.48-49）。

また、各検査においては、自己評価や自己受容の高まりを目指す必要性が強く示唆された。「小学校高学年になると、発達段階との関係で、友達関係での問題が大きくなる。（中略）教師や親からの称賛よりも、友達から認められることが重要な年齢なので、支援では意図的に友達から認められる経験を増やしていく必要がある」と指摘されている（前掲書 p.136）。

(2) 授業実践への示唆

そこで、A児が在籍している小学校特別支援学級で検証授業を実施する。A児と特別支援学級在籍児童らとの関係性が築かれており、安心して自立活動に取り組むことのできる環境である。検証授業第1期では、A児の不安や不満を受け止め、この思いを少しでも軽減することができるように小集団指導による友達と語り合う場を設定した。話すことで自分の思いと向き合ったり、相手の思いを知り共感したりする学習を通して、満足感を得ることができるのではないかと考えた。

その上で、検証授業第2期では交流学級での学習を設定し、友達との交流を通して考えを広げたり、さらにより多くの友達から認められたりする場面を

少しずつ増やしていくこととした。

3 実践研究Ⅱ (検証授業)

第1期 自立活動「今のぼくってこんなぼく」

—おはなしすごろくを楽しもう!—

A児の心の安定と自分自身の気付き(自己理解)について把握するため、自立活動の時間における小集団指導での検証授業を行った。

(1) 対象

特別支援学級(自閉症・情緒障害)在籍児童3名

(2) 期間 令和3年7月6日・7月13日 2時間

(3) 方法

学習中の児童の様子をVTR撮影して、A児の表情や発言等を観察した。また、ワークシートにより、心の安定や気持ちの変化について分析した。

(4) 授業実践に向けて

既習の自立活動の学習ですごろくを使った学習を行っており、A児含め児童全員が楽しんで学習をしていたと情報を得た。

そこで、和んだ雰囲気友達と語り合うことがで

きるように、「おはなしすごろく」を設定した(図6)。本教材の特徴として、楽しみながら自然な関わりの中で自分の思いに向き合うことができ、集中力が持続しにくい児童や他者理解を深めたい児童にも有効であると考えた。また、他者の思いに寄り添い共感しやすい教材である。

(5) 結果と考察

A児は普段話をしている時には答えづらそうな問いにも楽しみながら考え、答える様子が見られた。感想には「うれしいことがたくさんあったり、イライラする自分を知ることができました」と書いた。おはなしすごろくを通して自分の良いところの他に違う自分の姿があることを知り、自分と向き合い考えを広げたり、お互いの思いや考えを知ったりする機会となった。

また、「友達と仲良く楽しくできました」と書いており、本学習を通して、自分の話を聞いてくれた喜びや満足感を味わうことができ、心の安定にもつながっていると推察される。

The board game 'おはなしすごろく' consists of a grid of numbered squares (1-31) and a central goal area. The squares contain various questions and illustrations:

- 16:** 先生や友だちからほめられて、うれしかったことは?
- 17:** 学校の勉強で苦手なのは?
- 18:** 20歳の自分に会えるとしたらどんなことを話したい?
- 19:** ふれあい学級の友だちに言っておきたいことはある?
- 20:** 休み時間はいつも何をしているの?
- 21:** ごはんとパンどっちが好き?
- 15:** 家で、どんなお手伝いをしている?
- 14:** 犬とねこどっちが好き?
- 13:** 好きなおかしはある?
- 12:** 交流学級であつたらいいと思うルールは?
- 11:** 自分の好きなところを1つ言ってください。
- 10:** 学校で、好きな場所は?
- 9:** はやく速く走れる! 頭がよくなる! どちらの能力がほしい?
- 8:** 得意なことは?
- 7:** 交流学級のいいところは?
- 6:** 春・夏・秋・冬好きな季節は?
- 5:** 学校の勉強で何が好き?
- 30:** 今までで、いちばんうれしかったことは?
- 31:** 夏休みになったらやりたいことは?
- 29:** 今までの生活で、「大変なことをしちやっとな!」と反省していることはある?
- 28:** 将来、どんな仕事をしてみたい?
- 27:** 自分の性格でなおしたいところはありますか?
- 26:** 友だちとけんかをしちやっとな! どうする?
- 25:** 今日の朝、何を食べた?
- 24:** いいところを1つ言ってください。
- 23:** 今、こまっていることはある?
- 22:** 1回だけ、まほうをつかえるときしたら何をします?
- 21:** 1回だけ、まほうをつかえるときしたら何をします?
- 1:** 休みの日は何をしているの?
- 2:** 好きな色は?
- 3:** ふれあい学級であつたらいいと思うルールは?
- 4:** 苦手なことは?

The central goal area contains the text: 「自分のこと友だちのこといろいろわかったかな?」 and 「おはなしすごろくをして、友だちとの会話をしよう!」. The date 「令和3年7月6日」 is also present.

図6 おはなしすごろく

第2期 自立活動『自己紹介ブック』を作ろう！
—今のぼくって こんなぼく—

A児の自己理解の深まりや自己肯定感の高まりを目的として、その変容を把握するため、自立活動の時間における小集団指導での検証授業を行った。

(1) 対象

特別支援学級（自閉症・情緒障害）在籍児童3名

(2) 期間 令和3年9月7日～10月19日

週1時間扱いの8時間

(3) 方法

a 学習中の児童の様子をVTR撮影して、A児の表情や発言等を調査した。また、ワークシートを作成し、学習を通じた自己理解の深まりや気持ちの変化について分析した。

b ワークシートでは、授業開始直後と終了前での10段階評価による「表情メーター」を設けたり、自尊感情測定尺度（東京都版）の自己評価シートや「自己理解I amシート」を行ったりする等、A児の授業前後での気持ちの変化について分析した。

(4) 授業実践に向けて

①各関係機関との支援方法の検討

半構造化面接での様子や行動観察、諸検査の結果、検証授業第1期の様子について各関係機関と情報共有し分析を行った。それぞれの立場から、A児に対する見立てや指導内容、適切な支援方法について協議した。自信をもてるようにすることや褒めて認めてもらえる機会を設けること、興味関心を取り入れた活動の充実を図ることを目標とした。自分の得意不得意等を知り、良さを生かし伸ばすことができれば、A児の心の根底にある自尊感情の低下を防ぎ止めることができるのではないかと考えた。

②検証授業第1期と第2期のつながり

7月の検証授業「今のぼくってこんなぼく—「おはなしすごろく」を楽しもう！」と、9月の検証授業『自己紹介ブック』を作ろう！—今のぼくってこんなぼく—」につながりをもたせることで、「おはなしすごろく」で知った、自分では気付いていなかった自分の良いところや特徴について、より深く学習することができると思った。

そこで、検証授業第2期では「自分の思いや考えを広げる」ことを目的とした。今の「自分らしさ」を理解し、自分にできることは何か、周りの人に助

けてもらってできることは何かについて考えを広げることで、自己解決能力の重要性についても気付けるようにする（表1）。

表1 検証授業第1期と第2期のつながり

第1期	1	自分のことを知る	今のぼくって こんなぼく—おはなしすごろくを楽しもう！— おはなしすごろくをして、友達との会話を楽しむ。
	2		おはなしすごろくをして、自分のことをもっと知る。
第2期	1	自分の思いや考えを広げる	じこしょうかいブックを作ろう！—今のぼくって こんなぼく— 学習の計画を立て、目標を考える。
	2		★3年道徳(交流学級)「世界—うつくしい体そをめぐして—内村航平—」 5年道徳(交流学級)「短所も長所」
	3		自分のよいところがさと 友達が見つけてくれたぼくのよいところ
	4		自分のよくないところをなおすためには どうしたらよいか？
	5		自分のことをじこしょうかいワークシートにまとめる。
	6		タブレットを使って、発表のスライドと台本を作る。 <small>※朝学習の時間も使って作成</small>
	7		3年・5年(交流学級)「じこしょうかいブック」の発表会
	8		学習のまとめ ふりかえりアンケート

③道徳科との関連

教科等横断的な視点に立ち、道徳科と関連付けて学習計画を設定した（表1内★部分）。自立活動と道徳科を相互の関係で捉え、自立活動での学びがより深まるようにした。交流学級の児童と一緒に学ぶことで友達の思いや考えに幅広く触れることができ、自分と同じ考えの人もいればそうでない人もいることに気付くことができると考えた。

④「自己紹介ブック」の作成

毎時間のワークシート（図7）をファイルに綴じ込み、学習の積み重ねが一冊の本として形に残るようにした。一冊の本にすることで定期的に自分自身を振り返ることができ、思いや考えの変化を読み取れることもできる。そして、学習したことが形に残ることで、達成感や満足感等を味わうことができると考えた。

⑤自己理解を促す学習活動①「おはなしビンゴ」

ウォーミングアップの時間を設定し、ビンゴを使った学習活動を取り入れた。「おはなしビンゴ」の内容は児童が答えやすいゲーム的な内容にすることで話すことへの抵抗感を軽減することができ、友達との会話を楽しみながら自己理解を深めることができると考えた（図8）。

入数が減っているが、A児は自分で作った「自己紹介ブック」をめくり、学習したことを思い出しながら一つ一つよく考えて記入していた（表2）。記入内容を授業前後で比べると、自分の好きな物やポジティブに捉えられる内容、具体的には「自分のことを友達にもっとしょうかいしたいです。（しょうかいえい像もふくむ）」「友達に話を聞いてもらいたいです」と記入しており、友達との関わりを積極的に求める前向きな気持ちが表れていた。

検証授業を通して、自分には長所や短所、得意なことや苦手なこと等があることを知り、良さをさらに伸ばすことや苦手なことを今後どのように改善したらプラスに働か考え、自己決定することの大切さにも触れることができた。

②道徳科「短所も長所」の交流学習（自己理解②）

A児は「友達の目」（友達が見つけてくれたA児の長所）カードを友達から受け取り、嬉しそうな表情で読んでいた。読んだ感想をA児に聞いたところ、「初めて知った！ そうなんだ～って、気付かなかった！」と発言していた。

また、「友達の目」カードを受けた感想では「〇〇さんの『まわりの人のことを考えていて、いい人だと思いました。』のコメントを見て（ぼくは自分のことを）やさしい人だと思いましたが、おこられると、ぎゃく切れをしてしまったことがありました」と自分の良さを感じ取りながらも、良くなかった行動について振り返る内容を書いていた。

③「おはなしビンゴ」・ぼくの良くないところ（自己理解③）

短所となるところをどのように改善していくと良いか考える学習をした次の日の朝自習で、「おはなしビンゴ」をしていた際“イライラしてやっしまういけないことは？”のテーマで「ぎゃく切れ、言い返し」とワークシートに書いていた（図8）。書き終わったA児は、「でも今度からイライラしちゃう

たら、家にある黒いタブレットでYouTubeの映像を見て落ち着くしかない！」と前日の学習内容を踏まえた発言をしていた。

④自尊感情測定尺度（東京都版）（自己肯定感①）

A児の自尊感情を検証授業前と後で比較したところ、「A自己評価・自己受容」、「B関係の中での自己」、「C自己主張・自己決定」の3指標全てで数値が高まった（図9）。本結果を受けたA児との半構造化面接では、「なんかよく分からないけど（うまく言葉に表せないけれど）長所を増やしたい！あと、もっと知ってもらいたい！」と発言していた。

ありのままの今の自分を前向きな気持ちで受け止めつつ、本研究を受けてさらにいろいろなことにチャレンジしたり、友達と関わったりしたいというA児の自己肯定感の高まりを半構造化面接により把握することができた。

⑤ワークシートやVTRでの検証から（自己肯定感②）

毎時間のワークシートに、10段階の「表情メーター」を取り入れたことで、気持ちの変化を読み取ったり、学習の評価としたりすることができた（図10）。

交流学級での「自己紹介ブック」の発表会後で

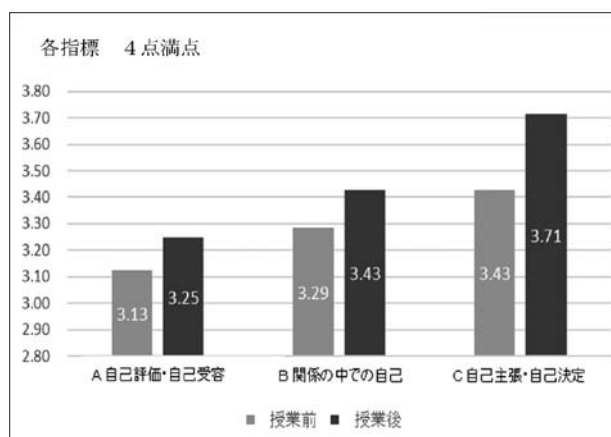


図9 A児 授業前と授業後の自尊感情の比較

表2 「自己理解I amシート」の授業前後での比較

	検証授業前（7月）	検証授業後（10月）
記入数	16個 ポジティブな内容 11 ネガティブな内容 5	14個 ポジティブな内容 14 ネガティブな内容 0
I amシートを行い気付いたこと	いろいろいやなことが起きていることが分かった。	いろいろ好きなものがあることに気づき、いろいろ変化しているような感じがした。

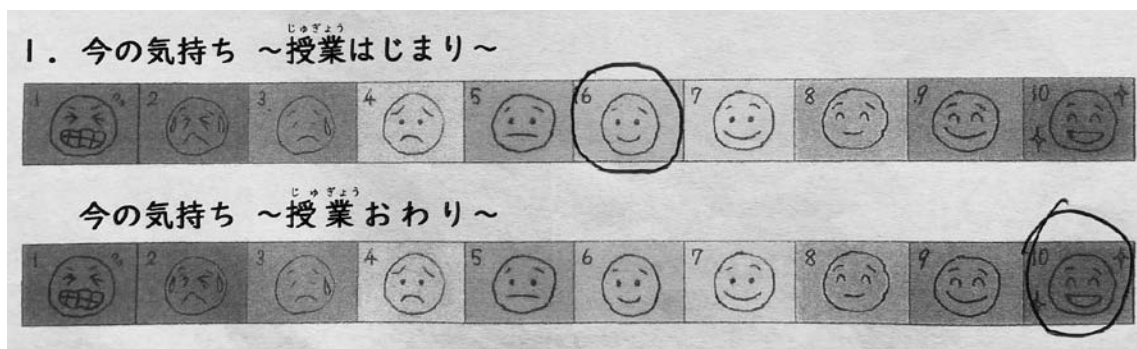


図10 10段階の「表情メーター」

は、普段自分から何かしたいと発言することがあまりないA児だが「自分の発表や動画が見れるアプリ『〇〇テレビゲームアップロード』を作りたい」と振り返りの際に9回も話題にしており、生き生きとした表情で話していた。

⑥授業終了後の様子から

先に触れたように、A児が強く開発を望んでいた「〇〇テレビゲームアップロード」は、特別支援学級担任や交流学級担任の協力の下で実現した。検証授業22日後の11月4日Microsoft Teams上に、A児は特別支援学級での国語の学習について説明をしている動画をアップロードしていた。

さらに、保護者との面談からは検証授業後にA児が、「(自分の)描いた絵を先生や友達に見てほしい」と発言していたことや「コメントも欲しい」と、描いた紙に自分でコメント欄を作っていたこと等、家庭でも意欲的に取り組む様子について知ることができた。

8月下旬の保護者との面談の際「A児が転校したいと訴えている」の情報を受けて、A児と2学期を振り返る半構造化面接を12月15日に実施した。現在の学校生活について質問をしたところ、「学校が楽しい」と回答した。

そして、「〇〇テレビゲームアップロード」の取組が充実していることについて尋ねると、「ぼくのことをもっと知ってほしくて!大桃先生と『自己紹介ブック』を作ってそう思ったんです!」さらに、「『自己紹介ブック』パート2を作ろうと思っているんです」と新たな目標をわくわくした様子で話していた。

4 総合考察

自立活動の授業実践への示唆として、以下の3点を指摘した。

(1) 実態把握の重要性

「自己理解I amシート」の記述内容から、A児の前向きな気持ちが読み取れる。検証授業前のネガティブな内容は決して悪いことではなく、自分の気持ちや考えを自分なりに受け止めることも自己理解であると考えられる。長期間のこのような学習の積み重ねが意識の変化に結び付き、前向きな感想へとつながっていることが示唆された。

(2) 自立活動の成果を発展させる

先に、「小学校高学年になると、発達段階との関係で、友達関係での問題が大きくなる。(中略)教師や親からの称賛よりも、友達から認められることが重要な年齢なので、支援では意図的に友達から認められる経験をする場面を増やしていく」(前掲書p.136)と指摘したように、交流学級での活動が大きな役割を果たしたと考えられる。

すなわち、交流学級での「友達の日」カードの学習活動を通して、A児は今まで知らなかった自分の姿を見つけることができた。そして、友達との関わりや認められる経験を意図的に設定したことで、自己理解を深めたり、称賛されたりする機会となり、自信につながったと推察される。

(3) 興味のある教材・教具の採用

「すごろく」や「ビンゴ」はもとより、今回は、A児が興味をもっていたタブレットを活用した。タブレットを使用した発表方法を取り入れたことや「自己紹介ブック」の取組を通して自分のことを知ってもらうことができた喜びが「〇〇テレビゲームアップロード」の目標に結び付き、A児の自尊心

情や自己肯定感の高まりにもつながっていることが示唆された。実際に、A児がどのような動画をアップロードしようか自己選択、自己決定した。そして、強く望んでいた取組が実現したことは「自己実現」へとつながり、A児の大変前向きな気持ちが表れている。学校や家庭における様々な取組からは、検証授業を通してありのままの自分を受け止めることの意味や友達と関わることの楽しさ、さらにいろいろなことに取り組んでいきたいという積極的で意欲的な様子が強く感じられた。

(4) 各関係機関との連携の重要性

①PDCAサイクルを機能させる

本研究を通して、教師の行動観察だけでなく、各関係機関から得た情報やその見立てと支援方法を取り入れた自立活動の実践が有効なことが示唆された。検証授業後の各関係機関へのフィードバックでは、「自信をもてるようにすること」「認めてもらえる機会を設けること」が適切な情報提供となったこと、A児への支援方針について共に検討する等、PDCAサイクルの重要性が改めて明らかとなった。

プロフィールシート			
学年	年 組	男・女	記入年月日:令和 年 月 日
氏名			記入者名
①学校での生活や学習の様子について・対人関係などについて			
②興味や関心のあること・好きなもの(遊びや学習、食べ物など)			
③ 子どもの様子と関係機関での対応	家庭生活		
	放課後・休日		
	教育機関		
	医療機関		
	地域・福祉機関		
地域の活動			

図11 「プロフィールシート」

②「プロフィールシート」(案)の作成

今回の成果を踏まえ、今後のさらなる授業実践の展開に向けて、各関係機関から得た情報を書きためておくための様式が必要であると考え、「プロフィールシート」を作成した(図11)。「プロフィールシート」は、保護者や各関係機関から情報を得た際に随時記録していくため、学年末の引継ぎ資料として使用することができる。今後も長期的な視点をもち適切な支援を一貫して行っていくために、得た情報は記録に残し、児童生徒一人一人の支援や指導に役立てていくことが大切であるとする。

③「自立活動の個別の指導計画(小・中学校版)」(案)の作成

②と併せて、小・中学校でのより良い自立活動の授業実践を目指していくことや本地域において自立活動の個別の指導計画が作成されていない。そのため、筆者は自立活動の個別の指導計画の作成が必要

6区分27項目で課題を分析する「自立活動の個別の指導計画」(小・中学校版)		
令和 年 月 日		
年 組 氏名 ()		
★課題と考えられる項目に✓を付けてください。		
項目	チェック欄	
健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関する事。	
	(2) 病気の状態の理解と生活管理に関する事。	
	(3) 身体各部の状態の理解と養護に関する事。	
	(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関する事。	
	(5) 健康状態の維持・改善に関する事。	
心理的な安定	(1) 情緒の安定に関する事。	
	(2) 状況の理解と変化への対応に関する事。	
	(3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関する事。	
人間関係の形成	(1) 他者とのかわり合いの基礎に関する事。	
	(2) 他者の意図や感情の理解に関する事。	
	(3) 自己の理解と行動の調整に関する事。	
	(4) 集団への参加の基礎に関する事。	
環境の把握	(1) 保有する感覚の活用に関する事。	
	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関する事。	
	(3) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関する事。	
	(4) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する事。	
	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する事。	
身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技術に関する事。	
	(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関する事。	
	(3) 日常生活に必要な基本動作に関する事。	
	(4) 身体の移動能力に関する事。	
	(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関する事。	
コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基本的能力に関する事。	
	(2) 言語の受容と表出に関する事。	
	(3) 言語の形成と活用に関する事。	
	(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関する事。	
	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事。	
実態から導いた課題		
年間目標(長期目標)		
前期の目標	前期の評価	
後期の目標	後期の評価 引継ぎ事項等	

図12 「自立活動の個別の指導計画」(小・中学校版)

であると考え、課題を自立活動6区分27項目で整理したものと自立活動の長期目標や短期目標を記載することができる「自立活動の個別の指導計画(小・中学校版)」を作成した(図12)。「自立活動の個別の指導計画」を活用し、小・中学校における個に応じた自立活動の授業実践の重要性を周知していくと同時に、学習指導要領解説自立活動編に掲載されている流れ図の活用も推進していく。

5 研究のまとめ

(1) 成果

- ①各関係機関による「自尊感情の低さは変わらず心の根底にある」というA児の実態から、自信をもてるようにすることや褒めて認めてもらえる機会を設けること、興味関心を取り入れた活動の充実を図ること等、具体的な支援策が明らかとなった。そして、「自己紹介ブック」作りの授業実践の際、「おはなしビンゴ」や交流学級での学習の機会等を取り入れたことで、友達から認めてもらうことができた満足感や交流学級の友達から多くの称賛のメッセージをもらうことができた嬉しさ等を味わうことができた。
- ②調査を含め、約半年の長期にわたる自己理解や自己肯定感に特化した授業実践に取り組み、A児の「分かる」や思いの高まりの評価や成果を「自己理解I amシート」や自尊感情測定尺度(東京都版)を使用し数値化したことで、A児の自己理解の深まりや自己肯定感等の高まりを明らかにすることができた。
- ③検証授業後には学校や家庭において新たな取組「『自己紹介ブック』パート2」を考える等、他者と積極的に関わっていかうとするA児の様子や自己効力感の高まりも感じられるような生き生きとした生活をしており、「〇〇テレビゲームアップロード」の取組が継続されている。
- ④各関係機関職員と家庭を含めた地域全体で、切れ目ないより強固な支援ネットワークが構築され、児童の成長を促し支えるという視点での教育実践に取り組むことができた。
- ⑤2.1の質問紙調査で指摘されたように、若手教員の増加もあり、自立活動の授業実践に不安を抱えていたり、各関係機関からの情報に基づく授業

が必ずしも十分でなかったりしていた。

しかし、今回一つの授業モデルを実践・提案することができたこと、そして、各関係機関からの情報をまとめる「プロフィールシート」やより良い自立活動の授業実践に向けた「自立活動の個別の指導計画(小・中学校版)」を作成し、提案することができた。

(2) 課題

- ①さらに自己理解を深め、自己肯定感の高まりを目指した授業実践を目標にする一方で、児童の成長と共に思いや考えに変化が現れてくること、日々精神的なことから気持ちに浮き沈みがあること等が考えられる。いつ、どのような学習内容を指導するか、その都度、実態把握を行い見極めていき、児童の実態に応じた授業実践を目指していきたい。
 - ②本研究の取組を筆者と特別支援学級の現担任が情報共有し、引継ぎを行う必要がある。A児の様子を見ながら本研究の取組と関連させた新たな学習の機会を設定し、継続性をもたせた授業実践が求められよう。
- そして、今後も各関係機関と連携し、具体的な共通の目標を設定すること、医療や福祉、教育等の立場によるアプローチを踏まえ、A児を支え見守っていく体制を整えていく必要がある。
- ③本研究において、「プロフィールシート」と「自立活動の個別の指導計画(小・中学校版)」の様式を作成し、小・中学校における自立活動のより良い授業実践に向けて検討してきた。今後、二つの様式を活用、修正し、その有用性を明らかにしつつ、学習指導要領解説自立活動編に掲載されている流れ図へとつなげていく必要がある。

6 倫理的配慮について

本研究における質問紙調査、ビデオ検証では、事前に研究協力者に研究の趣旨を説明し、協力者の同意と許可を得てビデオ撮影した。研究の趣旨や目的、研究協力者の個人情報保護、権利の保障、データの厳重な取扱い、研究成果の公表方法を説明し、承諾を得た上で、研究に協力してもらった。また、分析結果のフィードバックを研究協力者に依頼し、修正・撤回を希望する箇所がないか確認する等配慮した。

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々に御協力いただきました。

外房こどもクリニックの皆様には、事例児に関する情報の提供をいただきました。心より感謝申し上げます。

こども発達支援センターそらいろの皆様には、事例児の療育の参観や発達検査の分析等、実態把握に関する機会を設けてくださり、心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 池田泰子・中島香澄（2020）「特別支援学級教諭と外部専門家との効果的な連携に関する実践研究—心理検査等を用いた在籍児のアセスメントを通して—」『目白大学 健康科学研究』 第13号 pp.57-66.
- 佐藤慎二（2017）「幼稚園・保育所・小学校の先生必携！『気になる』子ども 保護者にどう伝える？」ジヤース教育新社
- 竹田契一・上野一彦（2018）『特別支援教育の理論と実践 [第3版] II 指導』 金剛出版 pp.48-49
- 東京都教職員研修センター（2011） 紀要第11号 自尊感情や自己肯定感に関する研究（4年次）
- 柳澤亜希子・棟方哲弥・李熙馥・小林倫代・野呂文行（2021）「特別支援学級での自閉症のある子どもの自立活動の指導—確かに育つ！子供 確かに高まる！教師の指導力—」ジヤース教育新社